

〔大江俊矩記〕文化六年十月九日丙申、七ッ入子堺重壹組新調、尤極上受合也、枅和世話ニ而、夷川柳也、十四年五月一日甲辰、出納内藏權頭來面、黒塗蒔繪三重之提重、桐白木箱入、萌一箱肴一折

生調一尾、生貝、三、等、隨身贈來之、海老二、生塗壘、

〔毛吹草三〕攝津 重箱産相物

〔俚言集覽〕知 重箱で味噌をするやう 重箱の中で洗ふと云諺もあり

〔書言字考節用集七〕器財フナ、今云檜重 盒杉重等也

〔類聚名物考〕調度十三 折

折櫃の略にて足なきをいふ、今は俗にはふち高ともいふなり、これにも足の有るもあり、

〔貞丈雜記七〕部 一折と云は木を折わけて箱にするゆへ折と云、足を折に直に打付る事はなし、折

に合せて臺をして、臺に足を付る也、ふたも釘にて打付る事なし、臺よりふたの上へ水引をかけ

て結ぶ也、蜷川記云、御折は三獻め五獻めより參候而可然候、乍去獻數少き時は、二獻めよりも參

候、きそくの物には箸はすはらず候、折の内にもりたる物、きそくしたる物ならば、箸を、又様體

によりすはり候事も候、玄ばりをばかげにてとき候て持出候也云々、玄ばりとは水引にて折を

結たるを云也、今時折と云は、折に直に足を打付、ふたをも釘にてしめ、削り花をふたの上にあ

也、是は古は折といはず櫃物と云也、折折に金らん段子くつわな、今時折一合といふを、折二ツの事

と心得たる人あり、あやまり也、折にかぎらず、唐櫃なども一合と云は、一ツの事也、すべて箱類を

ば一合二合と云也、

〔嬉遊笑覽二〕器用 今さ、折といふ物あり、是はさ、へ折にはあるべからず、さ、やかの義歟、俳諧三

疋猿に、さ、折しける折の饅頭といふ句あり、篠葉をしける物ゆる篠折か、神祭などの人數多き

弁當には、此さ、折を用る事、古への破子用ひたるも同じ趣なり、